

# 新期スタート!!

## 18期目のビッグチェンジ

## 所信表明

全国曹洞宗青年会  
第18期会長

久間泰弘



**全** 国曹洞宗青年会が「大衆教化の接点を求めて」を標榜して発足し、新時代の胎動が響き渡ってから34年、今また、私たちは大きな時代の転換期に差し掛かっています。

教化の接点を求むべき大衆・世間は、現代世相における政治の混乱、未曾有の経済危機に加え、教育倫理や食物の産地偽装に代表されるコンプライアンスの崩壊、また頻発する災害など多くの困難事に喘いでいます。さらに、我が国では毎年3万人以上の人が自死を選択し、引きこもりの数も100万人以上といわれ、何百万もの人たちがこの深い苦悩の淵に陥り込んでいます。

このような閉塞感と孤独感に蔽われた現代社会において、益々仏教に期待されることが多いにも拘らず、その教えは果たして大衆・世間に

全曹青の第18期の体制がいよいよスタートしました。「大衆教化の接点を求めて」を標榜してから34年。これまでも「教化の時宜」の検証と敷衍に取り組んできた全曹青の、また新たな挑戦が始まります。久間会長による「所信表明」で謳われている時代背景と問題意識をもとに、第18期は組織改編や新規事業など、組織としての転換「ビッグチェンジ」を敢行しました。今号はその第18期全曹青の全容を特集します。

### 目次

SOUSEI No.146 CONTENTS

新期スタート!! 18期目のビッグチェンジ…02
所信表明／ひと目で分かる第18期の組織改編 退任にあたって 全曹青ボランティアが変わります 第18期、全員集合! 第18期出向者一覧 任期中、ありがとうございました。第17期出向者一覧
全曹青、発信せよ。……………08
平成21年度 定期評議員会・総会 開催 仏法興隆花まつり千僧法要 開催
会計報告 ……………10
会則 ……………12
加盟団体ニューススポット ……………14
「第39回 九州曹洞宗青年会総会 長崎大会」レポート
賛助費浄納御芳名簿 ……………16
曹洞宗の袈裟に学ぶ 10 ……………18
New! 寺めぐり 街めぐり 1 ……………20
能登の祖廟 大本山總持寺祖院を訪ねて
New! メメント 生死を想う 1 ……………23

※「あまみずのダイアログ」は今号では休載とさせていただきます。

表紙写真：  
大本山總持寺祖院 法堂の扉  
旧・勤徳門の扉

対し十分に伝わっているでしょうか。私たちは、社会的要請を把握しきれないままに教えを発信し続けている一面があるのではないかと、とあらためて自らを振り返る必要があるように思えます。

いま、私たちには何が出来ているでしょうか。——こちらの都合で語られる苦悩や、寄り添うといった言葉だけの慈悲に一体何の意味があるのでしょうか。私たちが対峙する苦悩とは、観念的ではなく、常に具体的・現実的に認識される事象であるはずで。

いま、私たちは何をなすべきなのでしょう。——いつの時代でもそうですが、私たちに求められる事は、「言う」ことよりも、「行動」していくことでしょう。私たちはそこで待つのではなく、自らの具体的アプローチを通して人々の苦悩に対峙すべきではないでしょうか。慈悲とはその「行動」によってのみ成熟深化されていくものだと考えます。その行動と対峙を通して「いま何をなすべきか」をあらためて認識することが重要に思えます。この認識過程においては、深く厳しい自己省察を伴うことは論を俟たないでしょう。宗教者・僧侶の個我とは、自己省察という自身の内面にある苦悩や問題意識との厳しい対峙を経て体得していくものであり、この過程を無視する者は、ともすれば他者の持つ苦悩や問題意識をも封殺してしまう。結果、そういった姿勢には、社会に存在する苦悩

と連結しうる力を持ち得ないのです。

私は、この自己省察と慈悲行への具体的行動こそが、世間苦と私たちを密接に連結し、混迷する現代社会における布教教化への方途や、私たちの立脚点を明確にする道だと信じ、以下を会務執行の目標に掲げ、鋭意実践して参ります。

### ●スローガン

第18期全曹青においては、「**いのちの声に耳を澄ます**」というスローガンを掲げ、「大衆教化の接点を求めて」という全曹青発足の理念・経緯を振り返り、「苦悩する人々の伴走者となる」という強固な目的意識を組織全体で共有し、全国会員諸師とともに、その道を一步一步着実に進んで参りたいと考えています。

### ●基幹事業にFOCUS

基幹事業については、当該委員会を組織し「電話相談事業」をご提案申し上げます。当事業は、苦悩する人々への具体的方策の提示と、私たちの自己省察を促すことに有効な事業と位置付けます。青少年や高齢者をはじめとした様々な人々の苦悩に「耳を澄ます」という行為は、社会的要請へのコミットに他なりません。また、それは同時に、「自らの気づき」を深めていく行為です。その行動過程は、私たちの日常の職務や災害ボランティア活